

武蔵野日曜集会

霊と肉

ローマ書第8章1～17節

1978年6月18日(武蔵野)

小池辰雄

エン・クリスト 今やクリスト・イエスに在る者 絶対恩寵の現実 法身・報身・応身 永遠の生命の御霊の法則 自己中心が肉 新しきクリストの法 クリスト中心かマイホーム主義か もう直ちに聖霊は来ている クリストの気 クリストの義によって生命にある これ神の子なり エン・クリストという真如の姿

【ロマ8:1～11】

1 この故に今やクリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。2 クリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。3 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。4 これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。5 肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。6 肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。7 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、8 また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん。クリストの御霊なき者はクリストに属する者にあらず。10 若しクリスト汝らに在まざば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在らん。11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、クリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。

12 されば兄弟よ、われらは負債あれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて活くべきにあらず。13 汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。もし霊によりて体の行為を殺さば活くべし。14 すべて神の御霊に導かる者は、これ神の子なり。15 汝らは再び懼を懐くために僕たる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父よと呼ぶなり。16 御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。17 もし子たれば世嗣



たらん、神の嗣子^{よつぎ}にしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る。

●エン・クリスト

マルチン・ルターは「ロマ書を暗記するほど読め」と言いましたが、8章は特にそうですね。私もどう語っていいか分からないで困っています。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。²キリスト・イエスに在る生命^{いのち}の御霊^{みたまのり}の法は、なんじを罪と死との法より解放^{ときはな}したればなり。

非常にハッキリしている。「この故に」というのはもちろん、7章の闇の中に一閃の光が臨んで来て、

「我らの主イエス・キリストに頼^よりて神に感謝す」(ロマ7・25)

という言葉は直接には受けたわけです。もし、間接に言うならば、7章6節あたりから受けていると、両方のところを受けているというような事が言えましょう。学者もそんなことを言っていますが。要するに、「この故に」というのは、

「キリストの救いの故に」

というわけです。それだけはハッキリしている。

「今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし」

と。ここでも、

「エン・クリスト」

と書いてある。この「エン・クリスト」「キリストの中に」という一つの言葉をよく覚えてください。

「キリストの中に」

というと、

「私はまだ中に入っていない。中に入る入り方は、どうやったらいいだろうか」

なんて、自分の側のこととして普通は考える。そうすると苦しくなる。キリストは私たちを入れてしまっているんですから。入れてしまっているのに、

「中にとは何だろうか。私はまだそういう状態になっていませんが」

なんて、自分の状態を考える。自分の心の状態だとか、実存だとか、聖書の研究の度合いだとか、そんな自分の状態を考えて、「中に」なんて言ってみたところで、それは本当の確かさにならない。不確かさです。そんなものはどこまで行っても、不確かさです。確かさというのは、与えられたる確かさなんです。自分の方から作りだす確かさではない。それを普通、クリスチャンは間違えている場合が非常に多いわけです。

「エン・クリスト、キリストの中になんて言ったって、私はどうやったら入^{はい}れるん



でしょうか」

なんて。「入れるんでしょうか？」ではないですよ。もう入れられているのに、「入れるんでしょうか」ではない。

私はさんざん言っている。私は何回言ったって、自分でも飽きない。十字架でもう、過去・現在・未来の自分というものは片づいている。「エゴ」という、「我」という、エゴイズムのエゴというやつはもうここで片づいているんです。だから、

「私は十字架でもって無私とされております。無私の場合に置かれております」という、非常にムシのいい話であります。

●今やキリスト・イエスに在る者

無私、無我ということ。もう非常に簡単なんです。あまりにも簡単なものだから、みんなこれに気がついてない。空気があまり簡単なものだから空気に気がついてない。空気は絶対、恩寵なんです。私たちの自然的生命にとって、空気くらい簡単な、切っても切れない関係にあるものは他にない。

そして、十字架のまわりにグーッと光が来てしまつて、聖霊が十字架のまわりに充滿している。すつ飛ばされたところの無我、無私の中には、無量なところの無限なところの霊が——「無量寿」というのがあるから、無量霊とも言おうかな——御霊が、私たちの中に入ってくる。申し上げている通り、ガラテヤ書2章20節、

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや我れ生くるに非ず」

と。私は無私である。我という、自我というやつはもう生きていませんということ。

相対的小池には自我は生きているよ。だけれども、そんなことは問題にならない。問題にならないから、絶対恩寵の救いだと言ったでしょ。それが問題になるなら、相対的な私の善いの悪いのが問題になるなら、キリストの救いなんて要らないですよ。みんな、自分で修養したらいいだろう。自分で修養して、問題にしてどうかなるなら、十字架は要らない。ところが、どうかならないんだ。皆さんはなるか知らんけれども、私はならないんだ。私はならないから、この無私、無我をいただいてしまった。相対的な自分がどうであろうと、そんなことは全然、問題外になってしまった。過去も現在も未来も、すつ飛んでいつてしまった。本当にそれを瞑想してごらん。凄いいことになるから。そうしたら、

「主さまー」

と叫ぶと、もう聖霊に充滿されている。自分は御霊を呼吸していることがひしひしと分かってくる。空気を吸っているのではなかった、霊を吸っているんだと。キリストの霊を吸っているんだ。それが、

「キリスト・イエスに在る者」

という意味です。「エン・キリスト」というのは、キリストが中に入れてしまっているんです。



十字架で、聖霊で、入れてしまっている。「聖霊のバプテスマ」なんて言わなくてもいいくらいなものだ。

「まだ私は聖霊のバプテスマを受けていませんから」

なんて、何を言っているか。祈らなくても、瞑想して、これをパツと受けとったならば、事実が迫って来ている。事実が入り込んで来た。私は、

「今やキリスト・イエスに在る者」

と、ここに来て、グツと来た。「在る」とは本当にどういうことか。みんな、「在る、在る」と言って、在るような顔しているけれども、本当にどういうことかと言ったら、そういうことになってしまった。今日の集会はもうこれでお終いだっていい。これを本当に皆さんが捉まえたら、それでも「アーメン、ハレルヤ」で、言うことなし。これが「キリスト・イエスに在る」ということです。

「キリスト・イエスに在る者」は即ち、完全に救われているその現実の中に、御霊の中にある。「キリスト・イエスに在る者」というのは「御霊の中に在る者」と同じことです。また、「御霊を宿す者」と同じこと。全部、これは同じことです。「中に」というのは、それだけの凄いことなんです。いい加減に言っていることではない。

「キリスト・イエスに在る」と。楽しくなりましたか。

「そうだつ!」

と全身で応えていますか。

「先生は簡単に言うけれども、なかなかそう簡単にはいかない」

なんて。一番簡単だよ、簡単なことをなぜ複雑にするんですか、皆さん。頭がいいから。私は頭が悪いから簡単なのが好きなんです。

●絶対恩寵の現実

「この故に——キリストの十字架・復活・聖霊の降臨の故に——今やキリストの中にとつ捕まえられている者は」

と。もう、有無を言わせずにとつ捕まえられているんだから。

「それは受けとりません。そんなことはちよつと早すぎます。それは受けとりません」

と言つて躊躇している人は、どうぞ、躊躇してください。待っていますから。躊躇しないで、

「よし、もう今日、即刻入る」

と言う人は、入ってください。それはあなた方のご自由だ、入ろうが入るまいが。物理法則ではないんだ。皆さんは自由なんだから。私はかく言わざるを得ないだけの話です。

「キリスト・イエスの中に入れられているお前は——私は——もう罪に定められることはない」



ですよ。罪から解放されているんですから。これから罪があろうが無かろうが、罪に定められることはない。贖いは完了しているんです。過去完了・現在完了・未来完了なんです。いいですね。それだけ図太い信仰の中に入らなければダメですよ。

「まだ、それでも私は罪を犯しそうですから、罪に定められることもありそうです」
なんて。いくらでも、そう思ってください。それは十字架をいい加減にしているんだから。十字架はそんなことよりもはるかに素晴らしい。

この一句をそういうように瞑想しただけで、もう私はロマ書8章がスーッと分かってしまった。あの山上の垂訓の、

「恵^{さいわい}福なるかな、霊の貧しい者。天国はその人のものなり」(マタイ5:3)
と同じことですよ。そういうように簡単なんです。

「仏法はよきもあしきもへだてなし、わが本願にもらすものなし」

という木喰上人の歌があるではないですか。これは大好きな歌の一つだ。如来の本願にもれる者は一つもない。「善きも悪しきも」という、人間的な善いの悪いの、潔いの汚れているの、なんのканのと、そんなことは問題でありませんよと。本願は無条件に全てを救ってしまふ。キリストの本願はそれ以上だからね。そういう凄いことです。

「エン・クリスト」

というのは、そのような現実である。絶対恩寵の現実であるということをつまえていただきたい。

「この故に今やお前はキリスト・イエスの中に在るから、罪に定められることなし」

と読んでいい。

「キリスト・イエスの中に在る人はそうかも知れないけれど、私はまだそうでない」
なんて、そういう読み方をしては困る。

「この故に今やキリスト・イエスの中に在る汝は——我は——罪に定められることなし」

と。「我は」でいい、一人称で。一人称・単数・現在で。書き直しておけ、そんなところは。パウロは三人称的に言っているんだ、「在る者は」なんて。「在る我は」と、一人称の方がいいよ。聖書は三人称で書かれていても、一人称で読まなければ、自分の直々のことにして読まなければダメです。

私はそういう訳の聖書を書こうかな。誰も書けないよ、そんな訳は。「なんだ、小池先生の聖書は勝手気儘な訳だ」なんて。ああ、勝手気儘だよ。だけれども、パウロの根本精神をもっとハッキリ把んでいる訳なんです。パウロさんは天界で「そうだった」と言ってくれる。パウロだけが。他の地上の聖書学者はみんな、なんのканの言いやがる。私は、パウロさんが「そうだ」と、キリストが「そうだ」と仰ればたくさんだ。それだけの自信を持つ



てくださいよ。

「この故に今やキリスト・イエスの中に在る我は、罪に定められることなし。アーメン、ハレルヤ」

と。いいですか。そうしたら、力が来ますから。

2 キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、

「キリスト・イエスの中に在るところの生命の御霊の法、生命のあるところの霊の法」

という。日本語では「御霊」という言い方をしますが、ギリシヤ語ではただ「プニユーマ」という字だけです。「プニユーマ」という字だけを、あるときは「霊」と訳し、またあるときは「御霊」と訳していますから、その場合場合によつて。

キリスト・イエスの中に在る生命の霊の法。生命のあるところの霊の法。これは生命的な霊です。活きている。「ゾーエ」という、「永遠の生命」です。永遠の生命のあるところの、霊のその法則は、

なんじを罪と死との法より解放したればなり。

これもハッキリしているね。私を罪と死との法から解放してくれた、自由にしてくれた。「法」は「ノモス」という字です。罪の法、死の法と言いますね。「罪の価は死である」ですから、罪と死はまた分けることができないようなわけだ。「罪・死・地獄・サタン」が四位一体。また、「神・キリスト・聖霊・我」が四位一体です。

●法身・報身・応身

仏教では法という字をたくさん使いますね。法身、報身、応身という。アナルギア（類推的）に比較して言うならば、法身は聖霊です。報身は「ロゴス・キリスト」、天界のキリスト。応身は「サルクス・キリスト」、受肉のキリストです。まあ、そんな感じがします。これは私が言っているだけで、他の人が言っているのではない。そういうような具合に私はちよつと感じたから、皆さんに言うだけです。

「理事無礙の法界」

なんていう言葉がある。「理」というのは、「ことわり」ですから、かくあるべしという世界です。ドイツ語で言う「ソレン」(Sollen)です。「事」というのは、事実こうであるという事実の世界、「ザイン」(Sein)です。ソレンとザインの、理と事実(ザッヘ Sache)、それが無礙の法界であると。それがもう礙無(さわり)いところの法界。本当の法界は理事無礙であるというんだから、理事一如の世界であるということ。そういう法界を求めていたんだ、法然も。けれども、法然はどうにもならん。

「煩惱は身に添う影であつて、去らんとすれども去らしめることができない」

「菩提は水に浮かぶ月であつて、取らんとすれども取り得ず」



と。水に浮かんでいる月を取ろうとしても取れない。どうしたらよかんべえというわけだ。どうしたらいいんですか、これは。あなた方は法然よりも素晴らしい境地に入っているから、もう答ができるはずだ。「煩惱は身に添う影で、取らんとしても取れない。菩提は水に映った月で、取ろうとするともこれも取れない」と。煩惱は去れない影という。

これは何でもないですよ。この法身の聖霊を受けて、応身となることなんです。聖霊を受けて地上のキリストの如くなる。聖霊を受けて地上のキリストとなったキリストはいいよ。だけれど、我々は手放しでそれができない。キリストはやったです、それを。法身に受けて応身として現象、実現した。自現している。我々はできないから、さっき言った通り、十字架で既に贖われている。煩惱は十字架でもつてすつ飛ばされてしまっている。煩惱は有れども無きが如き世界に入ってしまったっている。そして、聖霊を受けているから、聖霊は光をもっているから、今度は影が消えてしまう。消そうとしても消せない影が、いや、消すまいとしても消えてしまうんだ、今度は逆に。消すまいとしても、光が内側にあるから、影が映らない。

太陽に影がありますか。太陽は影をもたない。

「心に太陽を持って」

という。だから私は、日本の国旗は好きだと言っている。自分自信が国旗となりなさいと。いわゆる国粹を言っているのでもない。一番最大の真理を国旗が表しているのに、なぜ、自分自信が国旗とならないんですか。自分の中に太陽を宿したら、影はなくなってしまう。水に浮かぶ月。今度は、自分が水となってしまう。聖霊は火でもあり、水でもあるから。聖霊を宿すと、止水に、静かなる水となる。そうすると、月影が宿る。菩提の世界は自ずからして成る。法然も、親鸞も、それだけの素晴らしい恩寵の世界を知らなかった。けれども、仏教の世界で、

「南無阿弥陀仏」

でそこへ入った。我々は、

「南無キリスト」

でもってその中へ入っている。

そういうのが、理事無礙の法界に、我々はキリストの恩寵の故にあるんです。法然が得ようとして得られなかった世界は、絶対恩寵として受けとっている。こんな無条件な恩寵の世界をなぜ遠慮しているんですか。遠慮は一つも要らん。降参すれば、その世界に入る。

●永遠の生命の御霊の法則

中世の神秘家にエックハルト(1260頃～1327)というのがある。彼はアウグスティヌス(354～430)、トマス・アクィナス(1225頃～1274)とともに最大の霊的な人物の一人です。これが「アップゲシャーデンハイト」(Abgeschiedenheit)と云うことを言っている。これはも



ともと「シャイデン」(scheiden 分かつ)という字からくる。自分から分かれること、自分から離脱すること。解脱、離脱。自己からの離脱、即ち無我の境地に入ること。「アップゲシューデンハイト」という。自分から抜け出して、神の中に自分を入れるという、そういった角度で彼も言っている。ドイツ語の「レーディッヒザイン」(Ledigsein)という言葉がある。自分自身から解放されることです。

中世の神秘家は、何とかして自分というものから抜け出ようと、神の中に入ることによって自分から抜け出ることを一生懸命で言っている。けれども結局、それは神人合一の瞑想的な神秘主義です。それは、ある人はある程度はできるだろうが、ある人はなかなかできないというようなわけでしょう。禅宗の悟りと同じようなものだ。ところが、福音の世界は無条件ですから、誰でもができる。誰でもが入れるのが一番最高最深のものです。何か条件がなければ、難行苦行しなければできないというものではない。お釈迦さんも難行苦行したけれども、難行苦行ではなかったということが分かった。分かつて、その世界へ入ると、もの凄い力が入ってくる。だから、難行苦行が今度是可以するんです、やろうとしなくても。難行にぶつかり、苦行に遭っても、それをやって行ける。自ら難行苦行する必要はない。患難に遭っても、それに打ち勝って行ける。パウロが正にそれでした。キリストの力でもって。コリント後書11章に書いてある通りです。

そんな素晴らしいことなんです。だからもう、そういったキリスト・イエスの中に入ってしまったところの永遠の生命の御霊の法則、活きた法則は、私を罪と死の法則から解放してしまつて、そんなものに囚われなくなつてしまつた。

法というのは力を持っている。物理法則は力を持っているでしょ。風が吹けば、風には力があるから、木の葉があのよう動く。木の葉の動くのはちゃんと法則に従つて動いている。現実の法というものは、「ダルマ」というのは力をもっている。だから、道徳法も本当は力があるんです。ところが、人間の中に別な法がある——それはロマ書7章で言っている通り——「罪の法則」というやつがまた力を持っている。こいつがその道徳法則に勝つてしまふ。罪の法則が勝つてしまつて、それをやつつける。

けれども、物理法則よりも素晴らしいのは今の「霊法」なんです。キリストの霊の法則。霊法と言つたつて、ただ法則を言っているのではない。力があるんですよ、力が。いいですか、間違えては困るよ。「どんな法則ですか」なんて。キリストの御霊をいただきますと、それは力を持っている。その力が作用する、その事態が霊法なんです。

だから、「解放したまへり」とは、

「キリスト・イエスの中に入れられてしまつているところの、永遠の生命の霊の法則は私たちを——お前を、私を——罪と死の法則から解放してしまつて、それに打ち勝つた」

ということ。パウロの言葉は——パウロの言葉に限らない——聖書の言葉は、その言



葉自身の内実は、みんな力を持っている。意味ではない。「そうですか。ああ、そういう意味ですか」なんて言つてね、今のクリスチャンはみんな「意味」でもつて頭で満足してしまっている。いつまでたつても同じことだ、意味が分かつただけで。何か問題を出すと、答案は書くよ。答案は80点か90点取るかもしれないけれども、実は身体で答案を書いてないから、それは0点だ。紙の答案を書けなくても、その身体で答案でちゃんと書いている人は本当は、神さまの学校では及第している。

だから、あなた方は学校で落第したつて、決してそれを悲観することはない。入学試験で落ちたつて、何のことはない。「できるの、できないの」なんて、そんなことではありません。一人びとりが内側にそれだけの本当の力を持つてくださいますよ。そうしたら、必ず人生のマラソンでは勝ちますから。一年や二年どうなつたつて、そんなことはもう全然、問題ではない。

「生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法から解放^{ときはな}したまいました」

「はい、その通りでございます」

と、皆さん、言えますか、心の底から、魂の底から。

●自己中心が肉

3 肉によりて弱くなれる律法^{おきて}の成し能^{あた}わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣^{つかわ}し、肉に於て罪を定めたまえり。

さあ、何を言っているのか分からない。分かりますか、これ。「肉によりて、肉が原因となつて、弱くなつているところの律法の成し能わぬ所」という。今の口語訳では、

「律法が肉により無力になつているためになし得なかつた事を、神はなし遂げてくださつた。すなわち、御子を罪の肉のさまで罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。」

少し口語訳の方が多少は分かりやすいかもしれないな。「肉」というのは、そこから売っている肉じゃないですよ。今日は題に「霊と肉」と書きました。生まれつきの生来の私たち、自己本位の私たち、自己中心の私たち、それを「肉」という。理性も、感情も——いろんな欲があるね、食欲も、性欲も、いろんな欲がある——それを全部ひつくるめて、自己中心であるときに、それを「肉」というんです。肉情のことを肉と言っているのではない。間違えては困る。あれは善くも悪くもない。みんな与えられた感性だから。与えられた私たちの全ての理性も、悟性も、感性も、全部それは与えられたものとして在るがままで、悪くも善くもない。それが神中心であるときに、善いという。己中心であるときに、悪いというんです、理性であろうとも。

今は素晴らしい科学の世界で、人間の知識はもの凄い展開をしている。地球の周囲に人工衛星なんかを回している。しかし、その理性が自己中心で悪いものだから、軍事的に使



ているではないか。相手の国の軍事基地やなんかみんな見えてしまう。お互いにそれを探っている。人まで映るそうだよ。

どんな学問であろうとも、それが自己中心であるなら「肉」です。神中心であるときに、それは全部、祝福された「霊」です。いわゆる「霊肉」と言つて、我々がいわゆる相対的な「霊的なもの、肉的なもの」と言っている、そういうことではないんです、この「霊と肉」というのは。自己中心で動いている一切のものが「肉」であり、神中心で動いている一切の我は、全我は「霊」なんです、神中心だから。

「神中心か、自己中心か」

ということですよ。

「律法が肉によりて無力になっている」

というのは即ち、自己中心であるために本当に霊の力を与えることができなくなってしまう、
「律法が無効」と言っている。律法は霊なるものにして、本当は生命を与えるはずなんだ。

「律法を本当に守る者は生きる」

と書いてあるんだから。

「無力になつて成し得ぬ所を神は成し遂げてくださった。即ち御子を罪の肉のさまで

キリストは私たちと同じ肉を備われた自己中心的なさまなんだよ。「さま」ですよ、間違えては困る。キリストは自己中心ではないけれども、私たちと同じ理性、悟性、感性を持つた普通の人間となつた。それが「受肉」ということです。「肉の下に置かれた」というのがそのことです。置かれているけれども、キリストは肉に負けていない。そこを間違えては困る。「罪の肉のさま」というのは、自己中心であることが罪だから、そういった自己中心である肉という有りさまで、

罪のために遣はし

というのは、「罪をやつつけるために遣はし」ということです。この「罪のため」というのは、目的の「ために」なんです。我々の罪をやつつけるために神さまは遣はして、

肉において罪を罰せられたのである。」

この肉という姿において罪をやつつけてしまった。即ち、十字架の贖罪でもってハッキリ、罪をやつつけてしまった。そういうことなんです、パウロの言っていることは。

●新しきキリストの法

これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完^まうせられん為なり。
はい、ハッキリしている。

「これ肉に従わず



自己中心的な歩き方に従わず、

霊に従いて

即ち、御霊中心で、キリスト中心で、神中心で、ということと同じことです。

歩む我らの中に律法の義の完^まうせられん為なり

律法が言うところの義が律法を満たすためであると。この場合の「律法の義」は、パウロが「我は律法の義につきては責むべきところなし」という、あの律法の義とは少し違う。律法が要求しているところの神さまの義を、それを全うするためであるということ。キリストが、

「汝らの義、学者、パリサイ人に勝らずば、天国に入ることはできない」

と仰ったその義なんだ。それは、キリストをいただいているから、この律法が言っているところの義を、律法以上に満たしてしまう。

キリストの山上の垂訓は、モーセの十誡以上にもつと深いものだ。キリストを受けとれば、それが私たちにはできる。

「敵を愛せよ」

なんて、モーセの十誡には書いてない。

「敵を殺すなかれ。人を殺してはいかん」

くらいのことだよ。キリストは「敵を愛せよ」と仰った。これは律法の義以上ですよ、キリストの義は。それはできるんです、キリストの愛がやってくれば。キリストの力ある愛だから、敵を担い上げてしまう。これは聖霊だから、聖霊の愛だから。天下無敵ということ。そういうキリストの御霊の力が律法を満たす。即ち、律法にもはや縛られない。律法に縛られなくて、律法を全うするのがこの福音の世界ですから。これは新しきキリストの法だ。新法だ。霊法は新法です。「キリストの法」という言い方もしている。

我々は地上でいくら救われても、手放して完全にできるとは言いませんよ。矛盾存在だから。パウロさんだって、みんなそうだ。アウグスティヌスだって、聖なんとかなんて言ったって、みんなそうなんだ。けれども、内側が本当に変わって、素晴らしいことが起きて行くから。ザビエルだの、フランチェスコみたいな人はそういうわけです。本当に御霊の人です。

ゲートルが『ファウスト』の中で、

「自分の中には二つの魂があつて、一つは地にしがみつき、一つは天に向かっている」

なんて言っているけれども、あれはまだ——あの「精神的」あるいは「霊的・肉的」というその範疇は——この大きな範疇の中に入ってしまうんです。両方ともこっちの方(肉)へ入ってしまう。そうであっても、ゲートルという人はこの世界が分からない人ではない。それはまた別なところにちゃんと出ている。ヨハネ伝を彼が訳すところにちゃんと出ている。



「自分の中には、何か内側に素晴らしいものが沸き立つかと思うと、どうしても涸れてしまつてダメだ。その泉は上からくる」

なんていうことをちゃんと言っている。

●キリスト中心かマイホーム主義か

⁵ 肉にしたがう者は肉の事をおもひ、霊にしたがう者は霊の事をおもう。

その通りです。

「地的なる者は地的なことを思い、天的なる者は天的なるものを思う」

というわけです。神中心・キリスト中心か、自己中心・マイホーム主義か、なんていうわけです。

⁶ 肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。

もうハッキリその通り。自己中心であると、そいつは死だよ。どんなに「幸せだ」とか何とか言つたつて、本当の幸せではない。本当の幸せは、どんなにいわゆる不幸に見えても、その人は本当の幸せをもっている。キリストを持つ者は本当の平安と恵福^{さいわい}をもっている。死んでも死なないものが来ている。人の思いに過ぐるところの歓びが来ている。私は正直、聖霊に代えるものは一つもないです。私から御霊を抜いたら、もう私は無くなってしまう。皆さんもそうでしょ。

それほど大事な御霊のことを、無教会時代に私は知らなかった。そして、私はこういうようになったら、無教会の人たちがみんな私をアウトサイダー(部外者)にして白眼視する。「ああ結構です。あなた方はお気の毒ですよ」と、それだけの話だ。たくさんの友人が、今でもそうです。

「肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり」

と、ハッキリ言っているね、「平安なり」と。力があるんですよ、この平安は。神・キリストにおけるところの平安は。私は手紙の表には必ず、誰に向かつて「平安」と書きます。あなたに本当の平安があるようにと。

⁷ 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服^{したが}わず、否したがうこと能わず、⁸ ま

た肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。⁹ 然れど神の御霊なんじらの

中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん。

「キリストの御霊」というのと「神の御霊」は同じことですよ。「パウロはここでは、神の御霊と言っているが、なぜ、キリストの御霊と言わないんだろうか」なんて、そんなバカげた疑問はひとつも要らん。学者の妙な分析的な頭はすぐそういうことを考えるんだね、バカみたいなもんだよ。全部、連関しているんです。

「神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん」

またパウロはこんな呑気なことを言っている。「神の御霊なんじらの中に宿り給わば」では



ないですよ、「宿っているから」ということ。

「もう宿っていますね、だから、お前たちは肉に居ないで霊に居ますねえ」

と。「霊に居らん」ではないよ、「霊に居る」ということです。仮定してものを言っただけダメだよ。パウロさんは少し遠慮してものを言っている。皆さんは、こんな仮定で読んでいたらダメです。

「然れど神の御霊わがうちに宿り給うがゆえに、我は肉に居らで霊に在るなり」と読まなくては。

●もう直ちに聖霊は来ている

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

はい、これもハッキリしている。さつきは「神の御霊」、今度は「キリストの御霊」とある。

「聖霊のない者はクリスチャンではありません」

と、ちゃんと言っているんだ。クリスチャンとは「キリストの^{もの}有」ということ。

「御霊なき者はキリストに属するものにあらず」

とハッキリ言っているのに、なぜ御霊のないクリスチャンがたくさんいるんだろうね。私もかつてはそうだった。それでクリスチャンだと思っていた。大間違いだ。ギリシア語の聖書では、

「もし、キリストの御霊を持っていないならば、その者は彼には属しない」

と書いてある。「属する」とはやはり二格で言っている。「彼のものではない、キリスト者ではない」ということ。

それで、あなた方はもう聖霊のバプテスマをみんな受けているんだよ、今日。私が、

「エン・クリスト」

ということをはッキリ言ったから。

十字架と聖霊はもう既定の事実であって、我々に既定の事実として迫っているから、「はいっ」と言っただけで受けとったら、もう直ちに聖霊は来ているんです。これが聖霊のバプテスマです。

まあ、こんなにハッキリ私は言ったのは今日が初めてだ。いいね。「2+2=4」というのと同じだ。「こちら側の心がどうだ、聖書の研究がどうだこうだ」なんていう、そういうことではありません。主體的現実です。主體的とはキリストが主体、神が主体ということ。神中心、キリスト中心な現実です。それに対してこちらは無条件に「はいっ」と言うだけ。いいですか。無条件降伏するだけです。

その無条件降伏の姿が祈りなんです。平伏しとか言っているのはそのことです。また、自己を投げ入れるという、祈入、祈り入るということもそのことです。「南無キリスト」というのもそのことなんです。



あんまり凄い真理でね、簡単に凄いから、みんな驚いてしまう。それが本当の、仏教でいうと空であり、無の世界です。さっきのエックハルトで言うと、「レーディツヒカイト」(Ledigkeit 放下)とか「ゲラセッソハイト」(Gelassenheit 全托)という言葉がそれに当たります。しかし、「レーディツヒカイト」とか「ゲラセッソハイト」という、もう自分を完全に明け渡して任せきっている、委ねきっているということも——こちら側の何か態度であるようなところがあるでしょ——しかし、それ以上なんです。「レーディツヒカイト」とか「ゲラセッソハイト」とかいう「放下」「全托」は、こちらの心理的情況ではない。そういった放下、全托の現実がキリストの恩寵によって与えられているということだけです。それは頭で「そうですか」ではないですよ。全存在で「はい」と言っ受けてるのが、これが本当の平伏し、と、本当の「南無」という帰入、ということなんです。もう何とも言えないです、それだけのなしだ。

●キリストの気

空気は、私たちは囲まれて吸っています。聖霊は、私たちをそのようにして掴み、そして私たちの中に入り込んでいるというわけです。いいですね。そうしたら、何だか知らんけれど、必ず力が来ます。力が来てなかったら、それは頭で受けとっているはなしです。

「気」の世界なんです。「気分」とかね、「病気」とかいう。これは気が病んでいる。人間の病気というやつは、身体が病んでいるのではない。気が病んでいる。気が病んでいると、身体が病むようなことになってしまう。そうでない原因のやつもありますけれども。根本的にはそういう場合が多いわけです。「健気」だとか、「元氣」だとかいう。これはみんな、キリストの気をいただいているのが、この健気、元氣の方なんだ。本気でやれなんていう。

「私は本気でやるぞ」

と言ったら、それは、

「私はキリストの気でやるぞ」

ということだよ。あなた方のは、そういう気でなければ、本気じゃないよ。そんなのは、うそつ気だ。それだけの気構えで行ってくださいよ。

「キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず」

「キリストの御霊をいただいていますから、私は本当にキリストのものです」と、必ず一人称にして読んでください。

●キリストの義によって生命にある

¹⁰若しキリスト汝らに在ま^いさば^{からだ}体は罪によりて死にたる者なれど^い霊は義によ

りて生命に在らん。

「キリストはお前たちの中に、私の中に在^いすがゆえに、体は罪によりて死にたる者なれど」



と。このところは「肉」と言わないで、「^{からだ}体」と言っている。「体」というのはこの場合は、私たちの感性も悟性もみんな持っているところの具体的な全存在としての我を「体」と言ったんです。ただ肉体のことを言っているのではない。そういう「体は罪によりて」、自己中心であるところの罪によって、サタンの力によって、「死んだ者である」と。自然的存在の私たちはそれによってやつつけられたから、罪が支配しているから、その価は死である。死んだ者で生ける屍だと。「ああ、この死の体」とパウロは言ったでしょ、ロマ書7章で。

「この死の^{からだ}体より我を救わん者は誰ぞや、主イエス・キリストの故に感謝す」と、パウロはひっくり返した。自然的な私たちは、罪に決定的には負けてしまうから、死に至る。

「^{からだ}体は罪によりて死にたる者なれど

生ける屍だけでも、新しく生きたところの

御霊におけるところの霊は、義によりて、

キリストの義をいただいている。その信仰によって義とせられている。その義です。

キリストの義によって生命にあるのだ」

と、同じことをいろいろな角度から言っているだけの話です。

11 若し^もイエスを死人の中より^{よみが}甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に^{うち}宿り給わば、

また、「若し」なんて言っている。甦えらせ給いし者の御霊がなんじらの中に宿っているから、キリスト・イエスを死人の中より^{からだ}甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。

「キリスト・イエスを死人の中から甦えらせ給いし神さまは、お前たちの中に宿り給う御霊によって、お前たちの死ぬべき体をも活かししてしまうぞ。復活させてしまうぞ」

と。楽しいです。コリント後書3章のところにも同じような言葉で書いてある。

12 されば兄弟よ、われらは^{おれ}負債あれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて活くべきにあらず。

「そういうわけだから、兄弟よ、私たちは負債があるけれども、肉に負う者ならねば、肉に従いて活くべきにあらず」

と。霊に対して、御霊に対して負債がある。「負債がある」というのは、そういった愛を受けているということです。

13 汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。

自己中心で生きるならば、死んでしまうぞと。我々はそういった矛盾構造の存在ですから、どうせ死にますよ、みんな。どうせ死ぬけれども、死なない生命が——肉体は滅びて行くけれども、死なない霊体が——それ乗り越えて次の世界に進んで行く。だから、



「死んでも死なない」

とキリストが言われたんです。どんなに健康であろうと、どんなに病人であろうと、同じことですよ。みんな死にますよ。私なんかは、もう70歳を超えたから、そろそろそんな時がいってくるか分からない。だけれども、使命がある限り、まず生きているとは思っていませんけれどもね。

もし霊によりて体の行為を殺さば活くべし。

「肉の支配しているところのそういった体の行為を殺すならば、そうすれば活きるぞ」と。

●これ神の子なり

14すべて神の御霊に導かる者は、これ神の子なり。

「神」と言おうが、「キリスト」と言おうが、同じことです。聖霊をいただいている者は神の子であります。

15汝らは再び懼を懐くために僕たる霊を受けしにあらず、

肉の僕、罪の僕の支配するような、そんな霊を受けているのではないと。

子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父よと呼ぶなり。

キリストが「父よ」と呼ばれましたね。私たちも神さまのことを「お父さま」(アッバー)と呼ぶことができる。それは霊が来て、神の子になつているからです。

現実はどうであろうと、そんなことはいいんですよ。

「まだまだ、私は神の子なんて言われるのはもつたいたいです」

なんて、そんなことはひとつもない。いつになったら、「もつたいたなくなる」のか。ダメなときで一向差し支えない。恩寵にあずかつている者は、「主さま!」「お父さま!」と呼べるんです。むしろ、いわゆるその当時のパリサイ人やサドカイ人や祭司なんていうのは、神さまのことを本当に「お父さん」なんて呼んでいなかったでしょう。

「父」という言い方は、言いだせばきりがいいからやめますけれども、これは旧約聖書からずっとあります。パウロが「エン・クリスト」という言葉をどれほど言っているかも、私はかなり調べたので、言えきりがいいから、それもよしておこうね。もう、楽に分かってきたでしょ、頭でなくて。

17もし子たらば世嗣たらん、

昔のことですから、すぐ「世嗣」なんていう言い方をする。

神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。

神の国を嗣ぐ者ということです。

これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る。

「栄光を受けんために苦難をも共に」という。だから、

「己が十字架を負いて我に従え」



という。これは具体的には、十字架を負うことが「苦難を受ける」ということ。己と、悪と、世の悪と、罪と、様々なことと戦うことは、それは十字架を負うことです。己を捨てている人が本当に十字架を負う。

「キリストの中に」

ですよ。いつも言っている通り、キリストの中に己を棄てている。キリストの十字架の中に自分を棄てている人が、十字架を負うことができる。キリストの十字架に負われた人が、負うことができるということです、もう少しハッキリ言えば。キリストの十字架に負っていただいた人は、今度は人のために十字架を負うことができる。十字架の一番大事な積極的な意味は、人のためにです。これが棄身の愛ということ。十字架を負うというのは、棄身の愛を持つということです。これは本当のキリストの愛の生命が来なければできない。キリストの愛の生命があればできていく、というわけです。

●エン・クリストという真如の姿

そういうわけで、ローマ書8章1節から17節が、あなた方に今度は身についたと思う。パウロの理屈でも何でもなかった。極めるともう、焦点はただ一つだった。

「エン・クリスト」

「キリストの中に在る」

という事実がつかというところ。十字架され、すっかり聖霊を浴びて、その御霊を呼吸し、御霊の生命をうちに宿しているという絶対恩寵の現実を受けとることが、「エン・クリスト」「キリストの中に在る」ということです。

仏教で「真如」と言うでしょ。私がよく「一如」と言う。「如」という字は、「真にその如く、あるがまま」という字です。だから、ドイツ語でいうと、「ザインハイト」(Seinheit)、「在る」という事態、あるがまま」ということ。それから、「正にその通りである」という「ゾーハイト」(Sohheit)ということ。ドイツ語というのは便利だね。「その如くある」というのは、「ゾーハイト」とか「ザインハイト」とかいうのがこの「如」という意味です。真如という。「キリストの中に在る」というのが、私たちの真如の世界なんです。そういう霊的現実、霊的根源、現実なんです。これが真如の姿。相対的な姿の奥にあるところの姿です。これが真如という。

だから、いつも祈り入る、祈入することが、

「南無キリスト!」

と言って祈入することが大事なんです、この真如の姿は。祈入はいつも恩寵を受けとる、絶対恩寵の現実の中に入るということです。そうすると、光がくる、力がくる、生命がくる。それが「エン・クリスト」です。エン・クリストという真如の姿に我々はなった。今日はそれでお願いします。

